北海道医報
ISSN 0913-0217　2009.10.1. 第1093号
発行人　北海道医師会長　長瀬　清
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円

節風季

『それからの三国志』と政権交代

情報広報部副部長　橋本洋一

第45回衆議院選挙の結果、自公の政権与党が大敗を喫し、民主党中心の政権に交代することが決定した。約50年間続いた55年体制の崩壊といえる歴史的な出来事である。ある一時期を除いて、戦後から現在まで、自民党中心の政権が続き、自由主義国にとっては、異例ともいえる政治状況が続いてきた。政権担当能力を有しない野党の存在がそういった状況を許した一因と言えるが、真摯に政策論議をした結果ではなく、与党の失策に依存した選挙での勝敗の繰り返しの中で、漫然と持続してきたのが実情である。今回の政権交代が今までと同じ経緯を経ないことを切に願っている。

映画《レッドクリフ》を観た。三国志の時代を三分類するとその中期に当たる赤壁の戦いを描いたものである。呉の孫権と劉備の連合軍が魏の曹操軍を破り、曹操の全国制覇を破った時期である。曹操軍80万に対して孫権・劉備軍5万と多勢に無勢といった状況の中での後者の勝利であった。BC202年に漢の高祖が開き、約400年間ものながきに渡って古代中国を支配してきた漢王朝が崩壊し、その後に続いた混沌とした三国志の時代である。古代と現代の違いはあるにせよ、不透明で不安感が世の中を覆っている現代の日本は、三国志の時代と酷似している点が少なくないように思える。

神保町の古本屋をのぞいた帰りに、久しぶりに三省堂書店の神保町本店に立ち寄り、ある文庫本を一冊購入した。550ページからなる『それからの三国志』（内田重久著）である。

『三国志』には『史記』『漢書』『後漢書』と並び称される史書である、晋代の歴史家陳寿が著した『三国志（正史）』と歴史小説に位置づけられる、明初期の作家羅貫中が書いた『三国志演義』の2冊があるが、一般的に多くの三国志ファンは後者の『三国志演義』の愛読家のようである。陳寿が著した『三国志（正史）』は人物別に書かれており、時代背景の比較がしにくく、小説（フィクション）である『三国志演義』と比較して面白味に欠ける点で敬遠される傾向にある。私も『三国志演義』の大ファンで魏の創始者である曹操を悪の権化、蜀の創始者劉備を正義の味方といった図式を頭に組み込み、蜀こそ正統な王朝であると蜀贔屓一筋で、多角的な見方ができるようになった現在も心情的には大きく変わってはいない。映画《レッドクリフ》で呉の指揮官周瑜が孔明を亡き者にしようと試みるが、孔明は上手をいって謀略をすり抜けてしまう様は、孔明を神がかりにしている『三国志演義』の影響かもしれないが、孔明の考えた【天下三分の計】の結果、呉との戦いで劉備・関羽・張飛が死亡してしまうのは歴史の皮肉と言えるかもしれない。『三国志演義』派の吉川英治氏、柴田錬三郎氏、『三国志（正史）』派の北方謙三氏、半藤一利氏の4者いずれも、三国志は、曹操の出現で始まり、諸葛孔明の五丈原での死をもって終了するといった考え方である。その後の30年は孔明・劉備・関羽・張飛・趙雲のような魅力的な登場人物も少なく、歴史的意義も低いとされ、重要視されることがなかった。『それからの三国志』は諸葛孔明の五丈原での死から始まるが、孔明の遺志を継いだ姜維が7回（『三国志演義』による。『正史』では《しばしば》）に渡る北伐を行った状況を中心に描かれ、263年、蜀の滅亡をもって終わる。孔明が五丈原に病死して以来30年間、蜀のために、知略を持って全力を注いだ姜維の人生そのものが『それからの三国志』であった。

新政権に参加する多くの若い人材は姜維のように、格差社会のない健全な社会を構築するために全力を尽くしていただきたい。小泉内閣によって疲弊した地域医療の再生のために、北海道医師会も郡市医師会の先生方と結束して、積極的な提言を行っていきたい。